

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	26000002	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	深海調査で迫るプレート境界浅部すべりの謎～その過去・現在		
研究代表者名 (所属・職)	日野 亮太 (東北大学・理学研究科・教授)		

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(評価意見)

本研究は、2011年の東北地方太平洋沖地震におけるプレート境界浅部すべりのメカニズムを深海堆積物の調査や地震波探査による海底構造の解明から明らかにしようとする意欲的なものである。深海堆積物コア中の乱泥流の痕跡の認定から2011年の東北沖地震で発生したプレート境界浅部すべりが、896年の貞観地震、1454年の享徳地震でも起こっていたことを発見するなど研究成果が上がっている。また、すべりを伴う巨大地震は日本海溝中部に限定されており、およそ600年周期でくり返し起こっていることが明らかになった。これらの研究成果を基に浅部すべりを伴う地震発生機構モデルの構築に向けた研究も順調に進展していると評価できる。浅部すべりの発生後の海底堆積物の観測から、堆積物の固着が進んでいることも確認している。

本研究の研究成果を基に国際共同研究も進展しており、今後の展開と発展が期待できる。また、深海底堆積物の探査に必要な研究船の運航環境が厳しくなる中で、それを補う努力も認められる。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待通りの成果があった。
A	本研究では、日本・千島海溝で深海底調査を実施し、2011年東北地方太平洋沖地震時に発生したような海溝軸地殻のプレート境界浅部での断層すべりが、869年と1454年の巨大地震時にも、同様な空間的拡がりでも発生していたことを明らかにし、巨大津波を発生させる断層すべりの発生範囲が少なくとも複数回の繰り返しのなかでは限定されることを見いだすなど、学術的・社会的に意義のある成果が認められる。